

女性の「こころ」と「からだ」における関係性の一考察

中 道 泰 子

〔抄 録〕

生産性を追求する父権制社会への女性の参加が進む中、近年、女性の「こころ」と「からだ」の分離が懸念されている。本論文では、女性の「からだ」が持つ本来の意味に立ち返り、女性のライフステージにおける人生の節目と連動して「からだ」に現れる「徴（しるし）」について検討する。その上で、女性の「こころ」の成熟と「からだ」の関係性について考察することを目的とした。

まず初めに、生涯発達研究を概観し、先行研究によって「女性の独自性」として導き出されてきた「関係性」に加え、「からだ」というキーワードを明らかにした。次に、女性の「からだ」が持つ意味を、対自己および対他者・社会との関係性の観点から検討し、女性の「からだ」に生じる「徴（しるし）」と、「こころ」の変容をもたらすイニシエーションの器としての「からだ」が担う役割について考察を深めた。最後に、現代社会において女性の「こころ」の成熟が成されていくために必要な課題を提示し、論を閉じた。

キーワード：こころ，からだ，関係性，女性の独自性，徴（しるし）

1. はじめに

高度に産業化された現代社会は、生産性を追求する父権制社会のシステムに基づいて成り立っている。これら父権制社会の中で、女性が適応し、活躍していくためには、自ずと男性的な生き方を強いられることになる。それは、女性に備わっている特性を切り捨てる危険性を孕んでおり、とりわけ男女の明確な違いを示す「からだ」がおざなりにされてしまうことになる。

Neumann (1980) の指摘にあるように、女性は、本来、精神的・霊的事象と身体的事象が深く結びついており、あらゆることを「全身で理解する」特性が備わっている。しかし、実際には「何千年にわたる父権制社会の歴史の中で、女性のセクシャリティ（からだ）とスピリチュアリティ（こころ）は分裂させられ、女性の自己実現を困難なものにしてきた（高石, 2004）」という状況が続いている。女性の父権制社会への参入が求められる現代社会においては、女性のスピリチュアリティとセクシャリティ、すなわち「こころ」と「からだ」の分離は進む一方であると考えられる。

臨床現場においても、自らの「からだ」を「こころ」から切り離れたかのように扱う女性と出会うことが増えてきている。自らの「からだ」を性の商品のように取り扱う女性、悲鳴を上げる「からだ」を無視し、酷使し続ける女性、果ては自分を痛めつけるかのように「からだ」を傷つけ、破壊行動を繰り返す女性。このような状態像を示しながらも、彼女たちの訴えの中に「からだ」への言及がまったくくなされないのである。「女性のからだが侵されることは、女性のこころをも侵すことになる（玉谷, 1985）」といわれるように、女性にとって「からだ」と「こころ」は不可分な関係にある。しかし、先述したように、父権制の色濃い現代社会での活躍を求められる女性たちの「からだ」と「こころ」の分離は進まざるをえず、そのことが女性の成熟にも大きな影響を及ぼしているのではないかと考えられる。

そこで本稿では、女性の「からだ」が持つ本来の意味に立ち返り、女性のライフステージにおける人生の節目と連動して「からだ」に現れる「徴（しるし）」について検討する。その上で、女性の「こころ」の成熟と「からだ」の関係性について考察することを目的とする。

2. 女性の生涯発達研究における「独自性」

女性の視点に立った女性のための生涯発達研究の始まりは、1982年のGilliganの研究に端を発する。発達心理学者であるGilliganは、男女における道德観の研究を通して男性は「分離」、女性は「愛着」という異なる自己の在り方があることを明らかにした。さらにGilliganは、これらの研究を通して、従来の発達理論は男性の声のみを取り上げ、女性が男性とは「異なる声」を語っていることを無視して作られていることを指摘したのである。このGilliganの言及が女性の生涯発達研究にとっての大きな転換点となり、男性アイデンティティの発達を中心に論じられてきたEriksonやHavighurst, Levinsonらによる従来のライフサイクル研究の中に、「女性の独自性」という視点が盛んに取り入れられるようになっていった。

アメリカの生涯発達研究について概観した竹家（2006）は、Gilligan（1982）以降の研究において導き出された男女の差異に関する共通点を、以下3つにまとめている。①男性は学問や仕事などの業績達成を重視し、それを中心にアイデンティティを形成するのに対して、女性は人間関係を重視し、それを中心にしてアイデンティティを形成する ②男性のアイデ

ンティティ形成は分離—個性化の過程が基調であるのに対し、女性のアイデンティティ形成は愛着—相互性の過程が基調である ③男性はアイデンティティの確立後に親密性を確立するのに対し、女性はアイデンティティの確立と親密性の確立が併行して行なわれるという3点である（竹家, 2006）。これらアメリカにおける生涯発達の研究から、「女性の独自性」として「関係性」というキーワードが浮かび上がってきたことが見てとれる。

日本においても、アメリカでの研究の流れを踏襲するように、女性の生涯発達に関する知見が積み重ねられていき（伊藤, 1998, 岡本, 2002など）、男性は分離志向なのに対して女性は「関係性」を志向するという考察が導き出されていった。その一方で、Eriksonに代表される発達理論の「直線的・段階的」という男性アイデンティティの追及の在り方に対し、「円環的」というキーワードをもとに女性のアイデンティティの発達を読み解こうとした研究がある（玉谷, 1985, 河合, 1989, 東山, 2006）。まず、玉谷（1985）は、「女性の存在の位相は、男性と異なり、高さより深さを、活動性よりは安定性を代表しているのである。そしてこれらの特性は、心ともからだとも区別のつかないものの属性である。つまり女性の心はからだと切り離せない」と女性の特性に言及した上で、男性の自我発達の方向は直線的であるが、女性の場合は「円環的」とであると指摘している。一方、河合（1989）は、女性の特性について「始めも終わりもなくすべてが全体としての輪の中に存在する」ことを指摘した上で、「一つの段階から次の段階への継時的に進歩するというのが男性的発想である。女性の目から見れば、すべてのものは最初から存在し、もっと円環的な変化を示すのではないかと思われる」と、男女の本質的な相違点について言及している。これら両者の指摘から、始めも終わりもない宇宙的な生命の循環の中に、女性という存在が位置づけられることが想起される。

先の河合（1989）の論を支持・発展させた東山（2006）は、「円環的発達と複線の発達の二重構造的」という新たな女性の心理発達モデルの構築を試みている。これら東山（2006）のモデルは、女性が「自分の中に子宮という小宇宙を抱え込んだ『個の歴史を超越した、宇宙的つながり』を生きると同時に『原初的なところのつながり』をも生きている存在である」という観点から構築されたものである。この心理発達モデルから、女性という存在が、宇宙的なつながりの中での生命の継承を担っていることが想起され、「女性の独自性」として「からだ」というキーワードが現れてくる。

そこで次に、女性のセクシャリティとしての「からだ」に焦点を当て考えてみる。

3. 女性のセクシャリティとしての「からだ」

セクシャリティには様々な要素が含まれるが、ここでは生物学的側面である生殖可能な性と、社会から期待される性役割について取り上げる。その際に、女性自身が、自分の「から

だ」をいかに捉えているかという「対自的關係性」と、他者や社会との関係性の中での「からだ」の在りようという「対他的關係性」の2つの側面から検討していく。

1) 対自的關係性

女性の「からだ」は日々のサイクルの中で変化する。その変化には、目にみえる形では捉えられない「からだ」の内、つまりはホルモン変動の影響によるものと、その影響を受けて変化する目に見えて捉えられる「からだ」に現れる「徴（しるし）」がある（※「徴（しるし）」については後述する）。これらはいずれも、自らの意志のコントロールを越えたところの変化である。つまり、主体である女性からすれば、自然に「訪れてくる」ものである、女性はこれらの変化を受け入れ、身を委ねていくことが求められる。

① 女性の「からだ」とホルモン

女性の自覚的な気分・感情・肌や身体・体調状態の変化に影響を与える要因の一つに、月経周期にともなうホルモン変動があることが河島ら（2018）の研究によって明らかにされている。「からだ」の感覚の捉え方には個人差があり、主観的感覚が大きく影響するとはいえ、河島ら（2018）の報告から、多くの女性がホルモンの変動によって、「からだ」だけではなく「こころ」の状態にも変化を感じていることがわかる。

一方で、これら女性ホルモンの変動には、心理社会的ストレスが大きく関わることも明らかになってきている。たとえば生体にストレスがかかると自律神経の中枢である視床下部に影響が現われ、卵巣から分泌されるエストロゲンという女性ホルモンの分泌が低下する（内田, 2019）ことがわかっている。エストロゲンとは、全身組織の健康維持のために多様な作用を及ぼす一生涯を通じて働く重要なホルモンである。これらエストロゲンの減少は、一般的には閉経前後の更年期女性に生じるものであるはずが、近年では20代から30代といった若年層にも更年期障害様の症状が発現しているとの報告もある。さらに、近年、婦人科系の疾患の増加も指摘されており、これらの背景には、「働き・産み・育てる」ことすべてを求められることによる女性のストレスの増大があるのではないかと推察される。

このような社会状況の中、女性自身の生殖観や身体観に変化が生じているとの研究結果が報告されている。田辺（2015）は、「子どもをもうけることに消極的あるいは否定的である」30代から80代の女性（年齢・婚姻歴・妊娠分娩歴・就業の有無や家族形態はきわめて多様な属性を持つ者）を対象に、生殖観および身体観についてのインタビュー調査を実施した。その結果、女性の生殖観・身体観が、従来の「生殖と密接な関連を持つ女性の身体」から、自らの生殖能を疎かにするような「生殖から離れている身体」へと変容しているということが明らかになった。しかも彼女たちにとっての「からだ」は、「自らの人生の選択を狭める」否定的なものとして位置付けられており、男性的に働ける「からだ」に価値を置いているとい

うことが示されたのである。田辺（2015）は、これらの研究結果から、生殖観や身体観の変化の背景には「女性が生物学的な身体を生きることができない社会状況」が存在すると指摘している。この研究では「子どもをもうけることに消極的あるいは否定的な女性」が意図的に選定されているとはいえ、調査対象者たちの語りから、女性が自らの「からだ」の自然な摂理に従って人生を送ることが難しいという社会の在り様が垣間見える。

しかし、いかに女性が男性的なアイデンティティを追求し、それに即した人生を生きようとしても、自らの生殖に関わる属性から逃れることはできず、「からだ」は生涯を通じてその内側からメッセージを発し続ける。先述の田辺（2015）の研究の調査対象となった女性たちも、男性的な身体観とでも言い得るような語り口で自らの身体を語り、月経には何の益するところもないという考え方を示しつつ、月経をめぐるホルモン変動による心身の不調に左右されている。つまり逆の見方をすれば、「からだ」の内側から発せられる声、すなわち不調によって、自らの「からだ」に立ち返らされているともいえる。つまり、「からだ」という実在が、女性を女性であることにつなぎとめていると言える。

② 女性の「からだ」と発達プロセス

女性は、「産む性」としての生殖機能を備えており、生涯を通して生殖機能を中心とした「からだ」の変化が続いていく。女性はこれらの変化を、初潮に始まる月経、破瓜、妊娠、出産、閉経という「血」に象徴される「からだ」に現れる「徴（しるし）」によって捉えることができる。これら血に象徴される「徴（しるし）」は、先述したように女性ホルモンの変動と連動して生じてくる。

女性のライフサイクルのステージをホルモン変動との関連から表わすと、次のように示すことができよう。

- I. 目覚ましい身体発達を遂げる幼少期
- II. 女性ホルモンの分泌が増加し、性差が出現する思春期
- III. 女性ホルモンの分泌が安定する性成熟期
- IV. 女性ホルモンの機能の退行・変化による不定愁訴が出現する更年期
- V. 女性ホルモンの分泌の停止・加齢による心身の変化が出現する老年期

あるステージから次のステージの移行は、生理的成熟に伴うホルモンの変動によって成されていることが見てとれ、さらに、これらステージの移行の時期は、心理的発達の転換点とも合致する。つまり、女性の心理的発達は、生理的成熟、すなわち身体的発達と連動して進んでおり、「からだ」の変化が女性の「こころ」の成熟と密接に関係しているといえる。

女性の「からだ」の知恵について読み解いたDemetrakopoulos（1937）は、「血を流すという女の能力」が女性性の成熟に深く関わっていることを指摘し、「血は女性的なるものの中心をなしている（Demetrakopoulos, 1937）」とさえ述べている。女性は、これら「血」に

象徴される変化の「徴（しるし）」を、「やってくるもの」として受け入れ、ライフサイクル上の新たなステージへと移行していく。これら「からだ」から示される自然の「徴（しるし）」は、女性を取り巻く社会状況が大きく変化している現代においても、変わらず女性の元を訪れてくる。そして、これらの「からだ」に現れる「徴（しるし）」が、否が応でも自らの性を強く意識させられる証（あかし）となる。たとえば、無月経がほぼ必発する神経性やせ症（anorexia nervosa；AN）の少女が、「毎月の生理が来るたびに、絶望的な気持ちになる」、「胸が膨らみ、生理が始まると、自分の身体が汚いものに思えた」とカウンセリングの中で訴えることも少なくない。神経性やせ症の発症要因のひとつとして「女性性の拒否」が挙げられるが、先の少女たちの語りを考え合わせると、月経が自分の性を強く意識させられる契機となっていることがわかる。これらのことから、「女性性」の受容と月経に代表される「からだ」の受容に深い関連があることが推察される。

月経についての研究を行った川瀬（2006）は、青年期女子の発達課題の一つとして「月経を自らの問題としてとらえ対処、受容する」ことの重要性を指摘し、月経をめぐる問題が、「女性として性同一性を獲得し、自らの人生において女性性をどのように具現化するか」といったライフコースの選択に関連することを明らかにしている。一方、高村（1992）は、月経が女性の性機能の象徴として、女性性および母性の発達に関連していることを指摘している。これらは、月経に焦点化された研究ではあるが、初潮に始まる月経の延長線上に妊娠・出産・閉経があると考ええると、これら「血」に象徴される「からだ」の変化と女性性、つまりは女性の「こころ」の成熟と深く関連しているといえる。つまり、「からだ」に現れてくる「徴（しるし）」を、女性自身がいかに受け止めるのかが、子どもから少女、女性、母、そして人間として成熟していくための鍵を握るといえよう。

2) 対他的関係性

女性の「からだ」は、他者の視線を常に意識させられ、成長していく。他者の視線にさらされ続けることは、女性自身に自らの「からだ」を意識させ、関心を高めさせることへとつながる。周囲からの要請に縛られ、そこに合わせざるをえなかった時代に比べ、主体的生き方の選択が可能になったかのように見える現代女性にとって、「からだ」の持つ意味は変化しているのであろうか。この点について、女性を取り巻く周囲との関係、および女性自身の内界との関係から考えてみる。

① 女性の「からだ」と周囲との関係

女性は、幼少期より「身体を守ること」にもつながる所作振る舞いについて、「しつけ」を通して教えられる。それら周囲からの関りは、自分自身の「からだ」に、自ずと意識を向ける視点を女性の中に根付かせる。その結果、自らの女という「性」を強く感じる内側か

らの意識と、他者の目から見た女性としての自分という外側からの意識が、女性の中に同時に育まれていく。つまり、「見られる」と同時に、自分をどう「見せるのか」ということが、女性の中に自然と身についていく仕組みが社会の中に存在しているといえる。これらの意識は、外側から植え付けられたものである。しかし、女性自身が主体となりこれらの意識を獲得すれば、周囲から「見られ」査定される受け身の立場から、「見せる」という能動的な立ち位置へと移行することが可能になる。これまでは「見られる」という受け身の状態に身を置いていた女性たちが、「見せる」という主体的な立場へと移行し、現代社会においては、積極的に「魅せる」ための「からだ」を女性が手に入れつつある。これら「見られる」から「見せる」、そして「魅せる」という立ち位置の変化が起こったのは、1990年代頃であると推察される。

この点については、化粧やファッションの観点から女子の文化論を読み解く米澤（2015）による指摘がある。米澤（2015）によると、もともと美容への関心が高かった日本の女性たちが、1990年頃から「完璧な肢体」のための身体改造や化粧によりいっそう励むようになったとのことである。つまりこの時期に、女性の立ち位置が「見られる」から「見せる」へと移行し、さらに現代では、女性にとっての「からだ」が『魅せる』ことによって、相手の視線を支配する（米澤、2015）ための道具として用いられるようになってきたと考えられる。実際に、街を歩く女性に目を向けると、社会の美意識からの要請に自らを合わせようとする保守的な化粧やファッションをまとっていた時代とは違い、近年では、女性自らが時代の美意識を作り出そうと積極的な姿勢が感じられる。このように、女性自身が、周囲からの要請に応じるだけの受け身の状態から、「魅せる」という主体性を手に入れたことは喜ばしいことであるが、一方で、「からだ」が「魅せる」ための道具としてのみ扱われ、女性にとっての「からだ」の持つ本質的な役割が失われるのではないかとの懸念が生じる。

たとえば、先述した女性の「からだ」が「見られる」から「見せる」へと変化したと考えられる1990年代は、援助交際や身に着けていた下着や制服を売るブルセラが社会現象となった時期と合致している。このことから、女性にとっての「からだ」が道具と化し、「からだ」の持つ本質的な役割から切り離されてしまっている状況が垣間見える。しかも現在にいたっては、ブルセラや援助交際の現象が、驚きをもって捉えられることもないほどに常態化していることに強い危機感を覚える。

先述した2015年の田辺の研究によると、調査対象となった女性の身体観として、「産まない身体に生殖能は不要である」という価値観の存在が確認されると同時に、女性の中に「生殖可能な身体としての自らの身体をケアする」態度が育まれてこなかった状況が明らかにされている。さらに、調査対象となった女性たちの中に「生殖に関わる臓器は不要」とするという一方で、女性性を明確にアピールできる乳房を必要とするような身体観が見出されており、彼女たちにとっての「からだ」は、単なる外側を覆う膜、あるいはアピールする道具と

してしか意味を成さないように受け取れる。

このように「こころ」から切り離され、道具として扱われる「からだ」の問題は、当然、女性の「こころ」の成熟プロセスにも多大な影響を及ぼすことは免れない。女性の「からだ」が持つ本質的な役割に価値が見出せないことは、女性としての「こころ」の成熟を阻害する大きな要因となるのではないかと考えられる。

② 女性の「からだ」と内的葛藤

女性は、内的葛藤を抱えたとき、攻撃性を外の世界に向けるのではなく、自分の内、つまりは「からだ」に向けて表現する傾向が強いといわれている。実際に、精神疾患の中には、男女の差が明らかに存在するものも少なくない。たとえば、摂食障害（神経性無食欲症、神経性大食症）や、DV・性暴力によるPTSDの男女比は1：20以上もの性差が存在する（高橋、2003）。これら摂食障害を含む心身症全般の男女差については、精神障害におけるような広範かつ正確なデータは少ないものの、心療内科の外来者からある程度、男女差が推測できる。玉田（2000）によって実施された心療内科（九大病院、中部労災病院）外来者数の男女比に関する調査によると、1989年の心療内科外来総数は女性が男性の1.33倍、1997年には女性が男性の1.92倍という結果が報告されている。また、同調査での主な疾患別による男女比は、摂食障害では女性が男性の43倍、過換気症候群は女性が男性の4.5倍であったことが明かにされており（玉田、2000）、これらの結果から、女性の方が男性に比べて心身症状を呈しやすいと推察される。また、摂食障害、過換気症候群といった疾患は、多少なりとも他者へのアピールといった関係性における問題が含まれると考えられることから、女性は男性に比べ、内的葛藤が「からだ」に症状化して現れるとともに、そこに他者との関係性におけるメッセージも付与されていることが見えてくる。

一方、何らかの方法で「からだ」にダメージを与えようとする疾患である自傷行為や抜毛においても、男女差が認められる。2010年に実施された「男女の生活の意識に関する調査」のデータを解析した阿江ら（2012）の報告によると、自傷行為は16歳～29歳の若年層において、男性に比べ女性の方が多い。抜毛症については、男女比では女性93.7%に比較して男性は6.3%（一般社団法人日本抜毛症改善協会、2019）と、女性の方が圧倒的に多い。また、「からだ」にダメージを与える究極の形ともいえる自殺については、既遂率については男性の方が圧倒的に高いにもかかわらず、自殺未遂は女性の方が高い（厚生労働省、2015）。一概には言えないが、自殺未遂は生きたいと死にたいとの狭間で揺れ動いている気持ちを、周囲に理解してほしいという気持ちの表れであるとすることも可能である。

以上のように、女性に見られる心身症状や精神疾患には、内的葛藤が「からだ」の症状として表現されていると捉えられるものが多く、そこに周囲へのアピール的意味合いが含まれていることが見て取れる。しかし、当事者である女性には、他者へのアピール性を含んだ内

的葛藤が存在することは意識されておらず、逆に言えば、意識できていないからこそ「からだ」を通じた表現として現れているといえる。カウンセリングの場で「からだ」の症状を丁寧に扱うことで、本人が抱えている内的葛藤に行きつくことは周知の事実である。これらのことから、女性にとっての「からだ」が、周囲との関りのための道具として、無意識的に用いられていることが推測される。

長年にわたり日本の家族や女性についての研究を行ってきたアメリカの心理学者Vogel (1992) は、精神療法場面におけるアメリカ女性と日本女性について、内的葛藤の表現方法に違いがあることを指摘している。Vogel (1992) によると、両国の女性共に人間関係の問題を抱えることが多いことは共通しているものの、アメリカ女性は内的葛藤を抱えた場合、それを直接的に訴えるのに対し、日本女性は身体的症状で表現するというのである。さらにVogel (1992) は、日本女性が身体的な病気の診断を必要とするのは「病気になることで、援助を求めるなどの自分のニーズを伝えることができる」点にあると指摘する。

日本女性がこのような表現をとる要因として、これまでの日本文化の歴史の中で、直接的表現や主張の機会を剥奪されてきた経緯が背後に存在すると考えられる。そのため、日本女性の中には、アメリカ女性のように内的葛藤を意識的に捉えようとする視点が十分に育まれてきていないため、身体化することで周囲との関係性を調整しようとする傾向があるのかもしれない。

以上のことから、日本の女性にとっての「からだ」は、内的葛藤を表現し、周囲との関係性を調整する道具としての機能を持つと考えられるが、ある意味「からだ」が「こころ」を保つための犠牲となっているとも言える。そこで、女性自身が自らの「からだ」に現れてくるものを「こころ」との結びつきの中で意識的に捉え、周囲に自らのニーズを伝えられるようになることが、「からだ」を守り、「こころ」をケアすることへとつながるのではないかと考えられる。

4. 女性の「からだ」におけるイニシエーション

これまで検討してきたように、女性にとっての「からだ」が、自己との関係性、他者・社会との関係性において重要な役割を果たしていることは明らかである。それでは、こころの発達プロセスにおいては「からだ」がどのような役割を持つのであろうか。

「からだ」と「こころ」の関係性について考えてみると、必ずしも「からだ」の生理的成熟に伴って心理的成熟が進むとは限らず、両者の成熟速度の間にギャップがあることが見えてくる。そこで、この成熟速度のギャップを埋めることが必要になってくるが、古来には、これら生理的成熟と心理的成熟を繋ぐためのものとして、イニシエーションの儀礼が行われていた。

イニシエーション（initiation；通過儀礼）とは、文化人類学者van Gennep（1909）が提唱した概念であり、「個人をある特定のステータスから別のステータスへと通過させることを目的とした儀式（van Gennep, 1909）」である。人は、誕生し、子どもから大人へと成長し、結婚、死といった人生の節目において、次のステージに進むごとに新しい役割や身分を獲得していく。未開社会においては、移行するこれらの節目の時にイニシエーションの儀礼が存在しており、その儀礼の中で「死と生」が象徴的に体験されることによって、「こころ」の変容がなされていた。このように、イニシエーションの儀礼を通過することによって、所属する社会での地位を承認されるとともに、自分自身でもその変化を体験し、確認できるという仕組みが存在していたと考えられる。これらの仕組みが消失してしまった現代社会の中で、死と再生を象徴的に体験し、「こころ」の変容が成されていくには、古来のイニシエーションに代わる仕組みを創出する必要がある。この点について河合（1996）は、現代社会は共同体によって施行される集団的なイニシエーションが喪失したため、「個人としてのイニシエーションを体験する必要性に迫られている」と指摘する。

未開社会において行われていたイニシエーションの儀礼について目を向けてみると、男性の場合は割礼や厳しい試練に耐えるといった行動や獲得すべきもの、つまりは何かを「為す（doing）」ことによって達成されるものを中心であった。一方、女性の場合は、個人の生理的成熟という自然の変化に合わせて実現していくもの、「在る（being）」ことによって変容が遂げられていくといった極めて個人的な儀式であった。女性にとって、生理的成熟が「からだ」の「徴（しるし）」として現れてくるという点は、イニシエーションの儀礼が消失した現代においても何ら変わっていない。変化したのは、現れてきた「徴（しるし）」の受け止め方である。

たとえば、古来においては血に象徴される儀式の一つである月経や出産は、全世界的に「タブー」とみなされると同時に、畏怖の念をもって扱われていた。日本においてはこれらは「穢れ」として扱われ、死を表す「黒不浄」とともに、経血を「赤不浄」、出産を「白不浄」と表わし、忌み避けられるべきものとされていた。これらの意識の背景には、月経という人智を越えた神秘的な領域へ関わる現象への畏怖、死につながる出血と関係する現象に対する感情から発した特別視であったのではないかとされている（宮田, 1996）。つまり、「女性の生殖現象を不浄とみなすことで、逆説的に女性の身体に備わっている生殖能力を際立たせ、社会全体が女性の身体に対する畏敬の念を深く持ち、結果的に女性の身体を保護することに繋がっていた（波平, 1985）」のである。しかし、現代社会では、生物学的あるいは医学的に月経や出産のメカニズムが解明されるにつれて、上述したような言い伝えや迷信は科学的根拠のないものとして一蹴されるようになった。その結果、女性の「からだ」に対する神秘性や畏怖の念が失われ、「からだ」に生じる「徴（しるし）」が担っていたイニシエーションとしての役割を、周囲だけではなく、女性自身が重要視できない状況が生じているの

ではないかと考えられる。たとえば、妊娠や出産は、本来、「個の歴史を超越した、宇宙的つながり（東山, 2006）」の中の生命の継承のための重要な価値を持っていたが、現代社会では「産むも生まないもその人の勝手」といった個人の人生の問題としてのみに閉ざされている状況へと変化してきていることが、田辺（2015）の研究からもうかがい知ることができる。

以上のことから、現代社会を生きる女性にとっての「からだ」は、こころの成熟を培う「イニシエーションとしての器」の役割を果たせなくなっているのではないかと考えられる。

5. 「こころ」と「からだ」の関係性

これまでの検討を通して、女性の「からだ」が疎かにされ、「こころ」との分離が深刻化している現状が明らかになった。現代女性にとっての「からだ」は、自分を魅せるための道具やストレスの受け皿としての道具、あるいは周囲へのメッセージを伝えるための道具として用いられるのみで、本来女性の「からだ」に備わる「個の歴史を超越した、宇宙的つながり（東山, 2006）」を持つという重要な機能に、女性自身が価値を見出せなくなっている。

それでは、このような状況に置かれている女性が、成熟のための心理的変容を果たせるようになるには、いかなる必要があるのであろうか。そのヒントを、イニシエーションについて論じるHenderson（1974）の言葉の中に見出すことができる。Henderson（1974）は、イニシエーションの儀礼の重要性について論じる中で、「おそらく男性はそれを知りながら、それを体験することができず、一方女性はそれを体験しながら、それを知らないからであろう。したがって、各人が体験することができると同時に、その体験をはっきり意識することができるような能力を獲得するようにならなければならない」と述べている。これらHendersonの指摘から、「からだ」と「こころ」の分離が進む現代を生きる女性こそ、「体験をはっきり意識する」能力を獲得する必要があるのではないか。そして、この能力を獲得する手掛かりをもたらすのが、「女性の独自性」である「からだ」にある。

共同体におけるイニシエーションの儀礼が機能していた時代の女性は、「からだ」に現れる「徴（しるし）」を自然に生じることとして、ただ待ち、受け入れ、その変化に応じた周囲からの要請に沿うことで、心理的変容が遂げられていたと考えられる。しかし、このような仕組みが消失してしまった現代社会においては、「からだ」に現れてくる「徴（しるし）」を指標とし、その「徴（しるし）」をめぐる体験のひとつひとつを意識的に捉えることが必要になるのではないだろうか。その作業を通して、単なる外側を覆う膜と化してしまっている道具としての「からだ」が、心理的変容を生じさせるイニシエーションの器として機能するようになるのではないかと考えられる。

「からだ」は実在である。女性は心理的変容につながるイニシエーションを、観念として

ではなく「からだ」という実在を通して体験する。女性は、自らの「からだ」に生じる「徴（しるし）」を受けることによって、ライフサイクルにおける新たなステージへと移行する。そしてステージの移行によって、周囲との関係性に変化がもたらされ、それに伴って在り方の変容が生じる。このように、女性の成熟プロセスは、「こころ・からだ・関係性」という3つの位相が相互に影響しあい、それぞれの位相の間を「生・死・再生」というイニシエーションの循環を繰り返しながら、次第に深まっていくと考えられる。

このプロセスにおいて重要な指標となる「からだ」に生じる「徴（しるし）」を、自らのライフサイクルの中に積極的に位置づけ、そこに人生の意味を見出していくこと、それが現代女性に託された重要な課題であろう。

〔参考文献〕

- 阿江竜介・中村好一・坪井 聡・古城隆雄・吉田穂波・北村邦夫（2012）わが国における自傷行為の実態 2010年度全国調査データの解析. 日本公衆衛生雑誌59（9）, p.665-674
- Demetrakopoulos, S, A（1937）/横山貞子訳（1987）からだの声に耳をすますと. 思想の科学社
- Gilligan, C.（1982）岩男寿美子（監訳）（1986）もうひとつの声. 川島書店
- Henderson, J, L（1974）/河合隼雄（訳）（1985）夢と神話の世界. 新泉社
- 東山弘子（2006）母性の喪失と再生. 創元社
- 伊藤美奈子（1998）人間の発達を捉える際の2志向性概念の提唱. 心理学評論41 p.15-29
- 一般社団法人日本抜毛症改善協会（2019）<https://tricho.jp/archives/440>（2020/8/10アクセス）
- 河合隼雄（1989）生と死の接点. 岩波書店
- 河合隼雄（1996）[新装版]大人になることのむずかしさ. 岩波書店
- 川瀬良美（2006）月経の研究-女性発達心理学の立場から. 川島書店
- 河島三幸・城しおり・中野詩織・村上泉子・引間理恵（2018）一日・一月・一年・一生, 女性のライフサイクルと心理（1）. 日本心理学会大82回大会発表論文集 p. 735
- 厚生労働省（2015）自殺対策白書. <https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/jisatsu/16/dl/1-08.pdf>（2020/11/10アクセス）
- 宮田登（1996）ケガレの民族誌 差別の文化的要因. 人文書院
- 波平恵美子（1985）ケガレ（民族宗教シリーズ）. 東京堂出版
- Neumann, E.（1980）/松代洋一・鎌田照男（訳）女性の深層. 紀伊国屋書店
- 岡本祐子（2002）成人女性のアイデンティティの危機と発達. 岡本祐子（編）アイデンティティ生涯発達論の射程. ミネルヴァ書房 p.79-120
- 高橋清久（2003）精神医学とジェンダー. 学術の動向8（4） p.13-19
- 高石恭子（2004）母性とエロス-原初的母子イメージの再考. プシケー 23, p.59-67
- 高村寿子（1992）月経と女性性-女性の生き方と月経教育. 産婦人科の実際 41（7）, p.983
- 竹家一美（2006）女性の生涯発達研究に関する一考察. 教育方法の探究（9）, p.73-80
- 玉田太朗（2000）心身症の性差と生殖内分泌系の関与. 女性心身医学5（2） p.83-86
- 玉谷直美（1985）女性の心の成熟. 創元社
- 田辺けい子（2015）「生殖から離れている身体」の医療人類学的考察. 日本助産学会誌29（1） p.35-47
- 内田さえ（2019）エストロゲンの機能とストレス. 国際抗老化再生医療学会雑誌2 p.11-18
- Van Gennep, A（1909）/綾部恒夫・綾部裕子訳（1995）通過儀礼. 弘文堂

Vogel, S (1992) アメリカ人治療者から見た日本の女性. 精神療法18 (6) p.24-9

米澤泉 (2015) 女子のチカラ. 勁草書房

(なかみち やすこ 臨床心理学科)

2020年11月16日受理